

7. 当院における最近3年間の虫垂炎手術症例の検討

安富 淳, 小川 清, 石神博昭
青柳栄一, 北川学代, 柏木福和
石井隆之, 江澤英史

(成田日赤)

当院における最近3年間の虫垂炎手術患者166例の中から、15歳未満の小児72例を対象として軽症群と重症群に分け比較検討した。この結果、他院初診時に他疾患を疑われたため、当科初診および手術が遅れ重症化した例が少なくないこと、術前保存的療法の影響などにより非典型的な所見を示した症例が多かったと思われることなどの問題点があげられた。これらのことを念頭におき、迅速かつ確かな診断と治療に努めることが重要だと思われた。

8. 当科における術後 MRSA 腸炎

清家裕, 大森敏生 (千大)

近年、問題となっている MRSA 感染、特に MRSA 腸炎に関して、当科における症例を検討し、以下の結果を得た。①MRSA 検出前の投与抗生剤として、第3世代セフェム系が多かった。②重症 MRSA 腸炎に関して、下部消化管疾患が原疾患として多く、また、術前の腸内殺菌と術後 H₂ブロッカー投与が発症に関与すると示唆された。③発症時白血球減少が重症 MRSA 全例に認められた。

9. 当院における MRSA 感染症に対する対策とその効果に関する検討

杉浦敏之, 鈴木亮二, 林 永規
相楽恒俊, 中村常太郎
(県立鶴舞)

当院外科棟での MRSA 感染に対する落下細菌、医療従事者の手指などの検体の培養による検討では、MRSA の直接波及する範囲は狭く、患者同志の直接感染よりは医療従事者の手などの媒体を介する形で院内感染が多いと考えられた。そこで当院では、感染者の隔離、ガウンテクニック、手袋、マスク、帽子の着用といった従来の対策に加えて、手洗いおよび感染者に使用した物品の処理を徹底化し、MRSA の院内感染を抑えることができた。

10. 汎発性腹膜炎症状を主とした小腸腫瘍の1例

若月一雄, 竹内 修, 姫野雄司
水島川和美 (国吉病院)

41歳、女性。下腹部痛あり超音波、CT より右卵巣腫瘍を疑い保存的治療行っても症状悪化し汎発性腹膜炎の診断で開腹。混濁した腹水があり、回盲部中心に高度の癒着を認め、回盲部から20cm の回腸に周囲に膿瘍を伴う鶏卵大の壁外性腫瘍を認めた。肝、リンパ節に異常なく、回腸切除術施行。腫瘍は充実性で病理では平滑肉腫であり、腫瘍内に分枝する瘻孔を認め、腫瘍の穿孔により腹膜炎を起こしたと考えられた。

11. 多発小腸ポリープを先進部とした成人腸重積症の1例

野沢聡志, 鈴木 秀, 塚本 剛
志村賢範, 真田正雄, 茂木健司
平田正雄, 今野暁男
(千葉労災)

症例は24歳の男性。主訴は右下腹部痛。平成3年10月2日より下腹部痛生じ、10月5日症状軽快せず当院受診、右下腹部に圧痛、筋性防御、Blumberg 徴候を認めた。急性虫垂炎による腹膜炎を疑い手術施行したところ、回腸末端より20cm 口側の小腸ポリープを先進部とした ileo-ileocolic type の腸重積症であった。ポリープは小腸横軸上に5つの有茎性ポリープが並んだ特異な形態であった。また、ポリープの一部に癌腫の存在が疑われた。

12. 回盲部腫瘍による成人腸重積症の1治験例

尾本秀之, 橘川征夫, 千見寺徹
水谷正彦 (千葉市立)

患者は78歳の男性で、イレウスの診断にて近医より当科転院。腹部単純写真、エコー、CT、近医よりの注腸写真にて盲腸癌を先進部とする腸重積症の診断にて注腸造影施行するも整復不能であったため緊急手術施行。横行結腸に盲腸・結腸型の腸重積症を認めた。用手整復すると盲腸癌を認め回盲部切除術を施行、成人のイレウス症患者では腸重積症も念頭において診断、治療に当たるべきことを再認識させられた。